

# 死者の夢についての考察

坂井 祐円

仁愛大学人間学部

## A Study of Dreams about the Dead

Yuen SAKAI

Faculty of Human Studies, Jin-Ai University

本稿ではまず、これまでの夢研究を概観する。そこでは深層心理学の無意識を前提とした夢分析から、脳科学による睡眠と夢との関連や記憶回路から夢を解明しようとする実証研究までを取り上げ、現象学派の流れをくむ現存在分析や社会構成主義による夢の考察に収斂する。その上で本稿がテーマとするのは、死者の夢である。死者とは現実の世界では死の境界を超えた存在でありながら、夢に登場するときには生きた姿をとって現れる。社会構成主義の立場では、現実の主観的感覚の集合によって構成されたものであり一つの物語であることを示しているが、夢もまた現実と等しく固有な世界であることを認め、そこに登場する人物の人格を認めて、その主観的感覚に焦点化する。こうした立場から考えると、死者の夢とは、死者を媒介として現実のみならず、異界ともつながっているのであり、超越性の発露であることが示されてくる。後半では、死者の夢に関する3つの具体事例を取り上げ、それぞれを超越性の観点から考察している。

キーワード：死者の夢、社会構成主義、夢分析、超越性、異界

### 1. 夢研究の概観

夢については、これまで様々なことが語られてきた。よく知られているように、精神分析を提唱したS.フロイトは、夢を満たされない願望を充足するための象徴的幻想と捉えた (Freud, 1900)。また、C.G.ユングは、夢を無意識のもつ補償作用の一つと捉えるとともに、とりわけ無意識の元型イメージのはたらきに注目して、夢を神話や伝説などと結びつけて解釈した (Jung, 1916)。

いずれにせよ、夢に何らかの象徴や隠喩を含んだ意味のあるメッセージ性を認め、夢分析を通してその意味を解読していこうというのが、無意識を前提とする深層心理学の立場である。

一方、20世紀の後半から、睡眠と脳の関連についての研究が進む中で、夢の発生メカニズムを記憶の回路をもとに解明しようとする試みが盛んになった。認知科学 (Winson, 1990) は、この研究に基づいて、夢には重要な記憶を再処理して定着させる機能がある、という仮説を提唱している。また、情報科学の分野 (Click & Michison, 1983) では、夢が不要な記憶を消去する役割をもつとする仮説もある。脳の神経回路は、記憶情報を処理し整理するうえで、情報過多になったり、無意味な情報にとらわれたりすることもあるので、好ましくない記憶情報を適宜クリーニングしなければならない。その役割を担っているのが夢であり、コンピューターに例えればノイズのようなもの

だという(櫻井, 2010)。さらに, 進化生物学の立場(Jouvet, 1992)から, 夢には遺伝的にプログラミングされた行動パターンを, 現実生活の中で行うために予めシュミレーションして確認する機能がある, という仮説が提起されている。

1990年代にfMRIが開発され導入されることで, 脳機能の詳細な客観的記述が可能になり, 脳神経科学が飛躍的に発展したが, このことは実証主義に立つ夢研究の仮説をより補強する結果となっている。

とはいえ, 「なぜ人は夢を見るのか」を客観的に説明しようとするこれらの試みは, 要するに脳機能の構造に関する機械論的な解釈をしているにすぎず, 夢を見た人の主観的感覚とは明らかにズレが生じている。印象的な夢を見て目覚めた朝に, 「なんでこんな夢を見たのか」と感じている人に対して, それは記憶の整理の結果だと説明されても納得がいかないだろう。

そこで, 個人がどのような夢の内容を想起するのかについては, パーソナリティ要因とストレス要因の組み合わせから説明しようとする認知心理学の立場(岡田, 2011)がある。たとえば, 不安が高く経験する出来事をネガティブにとらえがちな人は, ストレスフルなライフイベント(例えば, 転居や転職, 対人葛藤など)に接すると不快な悪夢を見る頻度が増す, といった具合である。この立場ではまた, レム睡眠に入ると自動的に脳幹網様体系が活性化して記憶情報にアクセスを始め, 思考を司る前頭葉がこれらのランダムな記憶情報を結合してストーリーを構成していく, という夢の内容生成のプロセスについての仮説を示している。あるいはまた夢は体調やストレスなどの影響を強く受けるという見方もある(松田, 2010)。生理心理学からすれば, 夢のストーリーに対して何らかの意味づけをしたくなるのも, パーソナリティ要因や身体感覚などが大きく影響しているのであり, とりわけ深層心理学の夢解釈などは, もともと客観的には意味のない記憶合成のイメージに主観的な操作を加える(夢の内容に意味づけしようとする)ことで, 夢を過大に評価しているにすぎない, ということになる。

さて, 「客観性と実証性の追求こそが科学の基本であり, エビデンスの認められないものに科学的価値はない」とする近代合理主義の態度で夢を考えるならば,

夢のもつ神秘性や, ましてや超越性に触れることなどまずあり得ないだろう。思考パラダイム自体を変換することで, 夢に対する見方はまったく違ったものになってくるのである。その核心となる思考パラダイムの典型として, ナラティブ・アプローチの理論基盤である社会構成主義の立場(Gergen, 1995)を挙げることができる。

社会構成主義では「現実とはことごとく社会構成の産物であり, 関係性が現実を作り, 意味は関係性の中で生まれる」と考える。ここでいう関係性とは, 言語やイメージなどから文脈生成される主観的感覚の交わりや共有を指している。客観性や実証性もまた, 科学という物語を共有する人々の主観的感覚の交わりによって作り出される現実であり, 主観的感覚の集合として社会構成されたものである。記憶の回路に基づく夢の客観的な説明というものも, 脳の現象についての相対的な解釈にすぎない。

他にも, 主観的感覚に焦点化し, 世界構成の起点を意識からとらえようとする実存的なアプローチとして, 現象学を挙げることができる。現象学の流れにある現存在分析を主軸とする精神科医や心理学者たちは, それぞれ独自の観点から多くの夢の事例を取り上げ, M. ハイデガーの存在論(Ontology)の影響のもとで夢と現実との関係についての哲学的な考察を深めている(R. ビンスワンガー『夢と実存』, 1930)やM. ボス『夢—その現存在分析』, 1953), D. ウスラー『世界としての夢』, 1964)など。また, 現象学的心理学の立場から夢分析の理論構築を試みる渡辺は, 夢における意識の特殊性やその存在意義について考察することで「夢もまた現実の世界と対等なもう一つの固有の世界である」ととらえて, 夢の独自性と原理を認めている(渡辺, 2016)。社会構成主義は現象学との親和性があり, 同じく夢の固有世界を認めることから夢を理解しようとする。夢の意味は共同作業的な対話を通して随時生まれるものであり, また変化していくものとする。そして, 夢を見た人, 夢の中に登場する人物, その夢の語りを聞く人など, 夢に関連する人々すべての関係性に注目する。このアプローチが興味深いのは, 夢に登場する人物にも一人格を認め, その言動や振る舞いなどにも注意を向ける点である。

## 2. 死者の夢の独自性とその意味

夢の内容には多種多様なものがあり、何をテーマとするかによって解釈もまた様々な方向に広がっていく。そうした中、本稿では、死者の夢について取り上げることにする。

死者の夢とは、「この世で生きていたが、すでに亡くなってしまった人物が、何らかの形で夢の中に登場する」という内容を含んだ夢のことを指す。死者は、生前に親しかった人、関わりの深かった人、影響を受けた人などが生前のままの姿で現れることがほとんどであるが、ときには幽霊や亡霊のような姿をとって現れることもある。あるいはまた、すでに亡くなっている歴史上の著名な人物が登場する場合もある。

なぜ死者の夢を取り上げるのかと言えば、現実の日常性から脱却している夢の典型例であるから、という理由がまずは挙げられる。

といっても、そもそも夢とは現実離れしているのだから、とくに死者の夢でなくとも日常性から脱却している夢はいくらでもある。ファンタジー性を帯びた夢の中では、現実には遭遇することのない生物（たとえば、ドラゴンや天使、宇宙人など）が出てきたり、現実にはあり得ない能力を発揮したり（空を飛ぶ、魔法が使えるなど）と、とてもユニークである。

夢のテーマの中で、死者がとりわけ非日常的で特殊であると思われるのは「死の境界を越えている」という点にある。ただし、死者が夢に登場するときは、生きている姿であり、夢を見ている者も生きているという認識に立っている。まれに「死んでいるはずなのにどうしてここにいるのだろうか」と夢の中で疑問に感じるときもあるが、いずれにせよ、夢の中に出てくる死者は死んではいないのである。しかも、生きている状態で現れるのだから、その夢自体は日常的であったりもする。死者が夢に出てきたことでその夢に非日常性を感じ取るのは、夢から目覚めて現実に戻ってからである。そして、「なぜ私の夢に死んだあの人が現れたのだろうか、この夢には何か特別な意味があるのではないか」と感じるのである。繰り返しになるが、目覚めたときにそのように考えるのは、夢に出てきた人物が死者だからである。死者は、現実の世界ではすでに死の境界を越えている存在である。にもかかわらず、

夢の中に生きている姿で現れてくるのである。ここに死者の夢のもつ独自性があると言える。

ここで、死者が死の境界を越えた存在であることについてもう少し掘り下げて考えてみたいと思う。

古代や中世では、夢は異界への通路ととらえられていた（西郷、1993・酒井、2001）。夢の語源は「寝目」や「寝見」、もしくは「夜目」とされるが、これは夜の間の寝ているときの特別な目すなわち「魂のもつ目」のことを指している。古代人は、睡眠を一種の仮死状態と考え、その間に異界に魂が導かれ、あるいは異界から使者が訪れて魂に影響を与えるなどして、そうした体験の内容が夢だと考えられていたのである。したがって、夢の中で起きた出来事や告げられた宣託などは、古代や中世の社会を生きる人々からすれば、人生の指針にもなり、きわめて重要な意味をもっていたのである。異界は、神仏や聖者が鎮座している聖域であるが、悪霊や妖怪、魔物もまた異界の住人であった。この世と異界との境界を分け持つのは肉体を離れた魂であり、その点で異界は死の向こう側の世界にほかならない。異界との交流とは、霊夢や観想によって、あるいは霊能者を媒介とすることで、死の境界を越えることだったのである。

現代人には、こうした古代や中世の人々の世界観を共有することはもちろん難しいだろう。歴史物語として受け取ることはできても、現実感覚とは大きくかけ離れている。これこそ社会構成主義が示す通り、その社会に生きる人々の主観的感覚が交差し関係するところに、現実が構成され作り出されることの証左であろう。現代人にとっては、生きている世界の比重があまりにも大きく、死の向こう側の世界など想像することはあっても現実感覚としては無いに等しいのである。

しかしながら、現代人が死の向こう側の世界に触れざるを得ないときがある。その一つが、死者との邂逅である。愛する者と突然に死に別れてしまうとき、その悲嘆や喪失のショックははかり知れない。「あの人は一体どこに行ってしまったのか」という問いが胸中をめぐって離れずにいるとき、そこでは死者との邂逅が始まっている。あるいは、大きな災害のあった被災地や悲劇的な戦争の跡地に出向いて、そこで犠牲となり亡くなった人々に思いを寄せたときには手を合わせ

ざるを得ない。ここでも死者との邂逅が起きている。死者を前にすると、人々は畏敬の念が呼び覚まされ、厳粛になる。それが死の向こう側の世界に触れるという瞬間である。そのとき死者は、死の境界を越えて、生者に呼びかけている。

死者の夢が深く印象的であるのも、そこに死者との邂逅が生じているからである。死者が死の境界を越えた存在であるからこそ、死者の夢を見た者は、その夢を等閑にはできなくなってしまうのだ。つまり、死者の夢とは、まさに超越性に開かれているのであり、夢を見た者の生の意味を逆照射して問いかけるはたらきをもっているのである。

### 3. 死者の夢についての具体事例とその考察

ここからは、具体的に死者の夢をいくつか取り上げて、それぞれに考察を加えていくことにしよう。

ここでの夢解釈の方法は、できるだけ夢を見た者の語りにも注意を払いつつ、そこから自由に連想を広げていくという形をとる。その場合、深層心理学の知見に頼ることもあるが、文化人類学や宗教学、あるいは死生学などの知見も参照しつつ進めていく。ただし、いずれの考察にも共通しているのは、死者の超越性というモチーフである。

#### 3-1. 自分の部屋に亡くなった祖母がいる

最初に取り上げる夢は、ある女子高校生が、自分の祖母が亡くなった日に見たものである。

##### 【夢 I】

自分の部屋に入ると、ベッドに祖母が座っていた。服装がいつもの服なのに、どこか光っている感じがした。祖母は、こちらをじっと見て、何か言いたいような感じだったが、何も言わなかった。

生徒は自分の部屋のベッドで寝ていて、この夢を見ている。夢から覚めたとき、祖母が実際に自分の部屋を訪れたのではないかと思い、周りを探したという。「祖母はこれまで自分の部屋に入ってきたことはなかったのに、祖母が自分の部屋にいるのは不自然な光景だった」と、生徒は語っている。また、この夢を見た

実感としては、「お別れに来たというよりも、何か言い残したことがあったから祖母は夢に出てきたのかと思った。何だろうと心当たりを探してみたが、よくわからなかった。このときはまだ肉体がある状態だったので、魂だけが家の中をさまよって、自分の部屋にたまたま来たのかもしれない」と語り、この夢の意味を自分なりに分析している。

なぜ祖母が亡くなった直後というタイミングで、この生徒の夢の中に祖母が現れたのかについて考えを巡らせてみれば、いろいろと想像も広がり、また様々な解釈も可能であろう。

日本の民間信仰の中には、仏教と習合した形で、「四十九日の間は成仏せずに魂だけがこの世に留まっているが、その間に親族がきちんと死者を供養することで成仏する」という伝承がある。夢を見た生徒にどこまでこうした文化的影響があるのかはわからないが、感覚的には共有している面があるのかもしれない。あるいは、彼女自身の素朴な直感で、人が亡くなっても肉体がある限りは魂が浮遊しさまよっていると考えたのかもしれない。ちなみに、祖母が火葬され遺骨になった後でも、彼女は祖母の夢を何度か見ているので、肉体があるかどうかは重要ではないようである。

心理臨床場面での夢分析であれば、まずはこの生徒と生前の祖母との関係がどうだったのかに関心が向けられることだろう。また、この生徒は自分の祖母が亡くなったことをどう受け止め、どんな精神状態にいるのかも気になる場所である。こうした観点から見ると、祖母が何か言い残したことがあるというよりも、この生徒自身が何か祖母に訴えたいことや心残りがあるのではないか、という見方も成り立つのである。

この点で興味深いのは、この夢の構図である。この夢では、本来は自分の部屋であるはずの場所に祖母がいて、自分はその部屋に入ってくる側になっている。部屋の主体は夢を見ている生徒であるはずなのに、死者である祖母がこの部屋の主体なのである。ここには、「生徒の主体に祖母が入れ替わる」というケノーシスの構図が見られる。したがって、こちらをじっと見て何か言いたそうにしているのは、本当は祖母ではなく生徒自身であり、祖母が生徒の思いを代弁したのだと考えることもできるのである。

一方、自分の部屋に入りながら、そこに亡くなった直後の祖母がいるということは、日常の世界が非日常的な異界の空間に変貌していることを示している。祖母の服装が光って見えることもこのことを象徴している。それにしても、なぜこの生徒は異界に入らなければならなかったのだろうか。異界は死の向こう側の世界であり、いったん異界に入り再びこの世界に戻ってくることで、心の変容が起きる。ユング派ではこうした死と再生のプロセスを個性化 (Individuation) と呼ぶが、この夢はまた、祖母の死をきっかけにして、生徒自身が死と再生の心の変容に向けて成長が始まっていることを予感させるものでもある。

### 3-2. 亡くなった大伯父が祖母のお迎えに現れる

次の夢は、中年にさしかかった男性が見たもので、死者からのお迎えの夢であり、同時にまた看取りの夢とも考えられるものである。

#### 【夢Ⅱ】

大伯父の前に祖母が着物姿で座っているのが見える。全体が青白いのだが、こっちを向いて私としゃべっている。手を伸ばせば触れられるし、実感がある。祖母は私のことを「先生」と呼ぶので、私が「先生と違うだろ」と言うと、「うん、〇〇坊や」と答える。私がまばたきした瞬間に二人の姿が消える。じわっと涙が出て、目が覚める。

この夢は、『プロカウンセラーの夢分析』という本の中に紹介されており、すでに著者による夢の分析が行われている(東山, 2002・207頁～209頁)。そこで、まずはこれを踏まえつつ、その上で別の観点から考察を進めてみたいと思う。

夢を報告した男性は、この時点で自分の母親と祖母の3人で暮らしていたが、祖母は病気がちでもう長くはないとの予感があった頃の夢であるという。夢の中に出てくる大伯父は、祖母の兄にあたる人で、10年ほど前に亡くなっている。男性は早くに父親を亡くしたため成人になるまで大伯父から経済的な援助を受けていたという。

大伯父の前に着物姿の祖母が座っており、全体が青

白い光を放っているのは、大伯父が死の世界から祖母を迎えに来たことを示唆している。夢を見ている男性は、「先生」と呼ばれる職業に就いており、祖母が自分の孫のことを「先生」と呼ぶのは、立派になった孫のことを誇らしく思っているからなのだろう。しかし、男性が訂正を促すと、祖母は一転して彼の子ども時代の呼び方に変える。そして、まばたきした瞬間に、彼の前から大伯父と祖母の姿が消えてしまうが、それは祖母が死の世界へと旅立っていったことを意味している。このことを男性は夢の中でも感じ取ってしまったために、涙を流しながら夢から覚めるのである。実際に、この夢を見てからほどなくして、祖母は亡くなったということである。

このように、この夢は、祖母のお迎えの場面に立ち会った夢であり、同時にまた祖母の死出の旅路を見送った夢でもある。ところでこの夢は、内容からすると、祖母が死を迎えるにあたって、孫である夢見者に別れの挨拶にきたということが中心のテーマであり、死者の夢とは言えないように見えるかもしれない。けれども、10年前に亡くなった大伯父が、脇役のような形でこの夢に出てくるのであり、その意味ではやはり死者の夢と呼ぶことができるのである。なぜ10年前に亡くなった大伯父がこの男性の夢に出てきたのかと言えば、夢の分析家は、その理由をお迎えのためだと意味づけている。

お迎え現象は、「死期が近づいた人のところに、すでに亡くなっている親族が現れて、会話をしたり大事なメッセージを告げたりする」という神秘体験である。これは、夢の中で起こることもあるが、むしろ覚醒時の意識状態で体験していることがほとんどである。調査報告(諸岡他, 2009)によれば、お迎え現象が起こった患者は死に対する恐怖感が薄れ、穏やかな死へと移行しやすくなるという。この点で、せん妄による幻覚とは明らかに異なっている。

さて、お迎えを体験するのはあくまで死期が近づいている当人であるが、まれに傍に寄り添っている親族などがお迎えにやってきた死者のヴィジョンと一緒に見ることもあるという(奥野, 2015)。この夢を死者の夢として解釈した場合に注目されるのは、夢見者が死者である大伯父が祖母をお迎えにきているところに

立ち会い、死の世界へと祖母を連れ去っていくのを見届けていることである。このことは、祖母の夢の中に死者のお迎えが現れることとは、意味が異なるように思われる。つまり、このときお迎えに来たのが、他にもない大伯父であったということが、この夢のもつ隠された意味なのではなからうか。亡くなった親族ということであれば、夢見者にとっての祖父（祖母にとっては夫）や父（祖母にとっては子ども）が現れることがあってもよいはずであるが、なぜか大伯父（祖母にとっての兄）なのである。

この夢では、祖母と大伯父の関係以上に、夢見者である男性と死者である大伯父との関係が隠喩として示唆されている。生前の大伯父は、夢見者にとって亡き父親の代わりとなり、成長を支えてきた存在である。今は経済的にも自立し、誇りある職業にも就くことができた。これは祖母や母のおかげももちろんあるが、亡くなった大伯父からの援助はやはり大きかったのであり、夢見者は大伯父への深い感謝の念をずっと抱いてきたのである。夢の中に祖母との会話が出てくるが、これは大伯父との会話としても重ねることができるだろう。大伯父もまた、育ててきた又甥の現在の状態に対して褒めたたえたいという気持ちがある。彼のことを「先生」と呼ぶのは、祖母の思いのみならず大伯父の思いでもあったと言えるだろう。そして、まばたきした瞬間に大伯父と祖母が消えていくのは、祖母の死の暗示であると同時に、この男性自身の家族からの精神的自立の時期が到来したことを知らせているとも考えられるのである。死者である大伯父は、祖母のお迎えとともに、夢見者の心の成長を見届ける役割として、夢に現れてきたのである。

### 3-3. 亡くなった父親が訴える二つの夢

次に示すのは、京都の釘抜地藏尊で有名な石像寺の住職である加藤廣隆氏のところに来談したクライアントが報告した夢である（東山・加藤，2007・169頁）。加藤氏は、浄土宗の僧侶であると同時に、臨床心理士の資格をもつカウンセラーでもあり、お寺の境内にカウンセリングルームを開設している。

#### 【夢3】

僕が家の前に立っていると、向こうから、何か大きな声でしゃべりながら若い男が走ってくる。よく見るとそれは父親だった。僕に話しかけているようだが何を言っているかはわからない。僕よりも若い父親だった。はつらつとした爽やかな若者だった。そのとき、後ろから「昔から、ああいう人間じゃなかったんだ」という声が聞こえてきた。

この夢を報告したクライアントは30代の男性で、何をしてもうまくいかないで悩んでお寺にお参りに来たときに、カウンセリングルームの張り紙が目にとまり来談してきたという。「劣悪な家庭環境に育ったせいだ」と語る彼は、酒びたりの祖父と父親が、母親をいびり、殴る蹴るなどの暴言暴力の毎日を見ながら育ったという。祖父が亡くなった後、この男性が専門学校に進学して下宿することになると、父親のDVはさらにエスカレートし、耐えかねた母親はついに家を出ていった。一人になった父親の最期は3年前に糞尿にまみれた哀れな孤独死だった。自業自得で当然の報いだと思いつつも、先祖の因縁などを気にかけるクライアントの男性は、父親や祖父を含めて先祖供養をしたいと住職に頼みこんだ。ところが、カウンセラーである住職はまだその時ではないと直感的に感じ、「あなたが本当におつとめをしたいと思う時がやって来たら、おつとめをしましょう」と話した。

その後、カウンセリングを重ねる中で、仕事がうまくいかないこの男性は、実家の土地を担保に入れようと考えて、父親が亡くなった後に戻った母親の住む実家に帰り相談をもちかけた。母親はあっさりと、土地を担保にしたらと言った。その後もしんどい思いが続いたが、そんなときにこの男性が見たのが先に示した夢である。

これは死者の夢ではあるがかなり異色である。夢に登場する父親は、クライアントの知っている姿の父親ではない。自分よりも若い頃の姿であり、酒びたりと暴力ばかりの父親とは全く違って、はつらつと爽やかな青年である。「昔から、ああいう人間じゃなかったんだ」という声が誰のものかはわからないが父親に対する非常に示唆的なメッセージである。夢のこと

が気になったクライアントは、母親に電話して父親の昔のことを聞いてみた。それによると、父親は若いころ鉄道マンに憧れ国鉄と大手私鉄の試験に通るが、祖父の反対にあって諦めてしまい、したくない仕事に就いて、やがて思いを通すことのできない意志の弱い自分に嫌気がさして酒におぼれる日々になっていったのだという。これはクライアントが初めて聞く話であり、父親の弱さやその人生の哀れさが、なんとなく理解できるような気持ちになったという。

こうしてみると、この夢は、亡くなった父親からの切なる訴えであったことがわかる。つまり、「昔から、ああいう人間じゃなかったんだ」という声は、死者である父親が息子に自分のことをわかってほしいと願って発した言葉にほかならない。

さらにその1カ月後くらいに、クライアントは、次のような宗教的な夢（東山・加藤（2007）・170頁）を報告している。

#### 【夢4】

僕は、実家から納屋への道が三叉路になっている場所で、母親をなじり、いじめて、殴る蹴ると暴力をふるっている。すると、三叉路の納屋のほうではないもう一方の道の向こうから、明るい光が見えた。その光はだんだんこちらに向かって近づいてくる。その光の中をよく見ると、女性の菩薩がおられた。とてもあたたかで、すべてが包み込まれるような不思議な感覚になった。

一見すると、先の夢との関連が見出しにくいですが、これもまた死者の夢である。このクライアントは、先の夢を通して、亡き父親の心情に自分のうまくいかない人生を重ね始めている。それはまた、父との和解の始まりでもあり、そのために父親と息子が同一化しつつあるのである。この夢の中で、母親をなじり、いじめて暴力をふるっているのは、クライアントの男性である。しかしそれは、実のところ息子と同一化した父親の姿にほかならない。ここにもやはりケノーシスの構図が見られる。したがって、この夢もまた、死者である父親からの深い訴えとメッセージが込められたものとなっているのである。

母親をいじめ、暴力をふるう父親。それは息子が見てきた生前の父親の日常の姿である。そして、その姿は、今度は夢の中で息子となって再現されている。クライアントの目線から見るとわかりにくいのであるが、死者である父親の目線に立って考えるならば、これは自らの贖罪を求めている夢なのではないだろうか。このことは1カ月前に見た夢と関連づけたときに、つまりは先の夢の最後に伝えられた「昔から、ああいう人間じゃなかったんだ」という声を、この夢の情景のナレーションとして当てはめてみることで、はっきりと見えてくる。「妻に暴力をふるっていた自分は、あるべき自分ではなかった。本当はそうではなく、はつらつと仕事に誇りをもった人間でありたかったのだ」と。そして、こうした訴えのために、この夢は女性の菩薩が現れる宗教的な霊夢へと転換するのである。

カウンセラーである加藤氏（住職）は、この光の中の女性の菩薩の出現の意味を、親鸞が六角堂参籠で見た女犯偈の夢告との共通性が感じられるとして、暴力に犯されるままになっている母親とは、実は慈悲深い菩薩の姿であることの暗示なのだと考察している。ところが、菩薩は近づいてはいても、母と菩薩が一体になっているわけではない。そのために、クライアントは暴力をふるわれている母が慈悲の菩薩であることに気づかないでいる、と解釈している（東山・加藤、2007・176頁～180頁）。

しかしながら、この菩薩出現の出来事は別の解釈もできるように思われる。慈悲の菩薩は、母と一体となって傷ついた癒し手になろうとしているよりは、母に暴力をふるう息子（＝父親）の状況そのものをまるごと包み込もうとしているかのようである。それは父の贖罪を求める気持ちをありのまま受け止め、その罪業を浄化しようとするはたらきであるようにも思われる。夢の終わりに、クライアントが「とてもあたたかで、すべてが包み込まれるような不思議な感覚になった」のはそのことを暗示している。

さて、二つの夢を見たクライアントの男性は、この後、祖父母と父の戒名を紙に書いてきて、住職でもあるカウンセラーに三人の法要を改めて頼んできた。今度は、その時がきたと感じた住職は、法要を引き受け

ることとした。クライアントは落ち着いて三人の法要に臨んだとのことである。

この出来事は、夢を通して父親との関係を和解の方向へと回復していったクライアントの精神変容の状況を見事に反映しているとともに、死者である父親の罪業が息子からの供養を通じて浄化されていったことを象徴していると言えるだろう。しかも、この状況の全体性を布置して転換の方向に導いたのは、慈悲の権現とも言うべき菩薩に象徴される超越性のはたらきであるとも思うのである。

#### 4. 死者の夢を通して異界とつながることの意義

夢の意味を考えるとというのは、主観的な偏りをもった作業のように見えるが、心理臨床の場面を通して考えると、夢と現実とは驚くほどつながり合っていると感じざるを得ないときがある。ただの夢の話にすぎないと軽視することができないほど、豊かで多くのメッセージ性が、夢には確かにある。それは夢の不思議であるとともに、心の不思議でもある。

本稿で取り上げた死者の夢では、夢が現実とつながっているのみならず、さらに異界ともつながっていることを示している。このことは、夢を見た者の視点に立つだけでなく、夢に現れる死者の視点に立つことによって可能になる。死者もまた、夢という固有の世界を生きている住人であり、個人の枠内に限定された心理現象には還元できない、一人格としての存在であると考えられることは、科学的思考に馴れ親しんでいる現代人からすれば、あまりに突飛であり、妄想にすぎないと感じられるかもしれない。ところが、社会構成主義のように、ストーリーに登場する人物のそれぞれの主観的感覚にスポットを当てる、といった方法論を採用することで、とりわけ夢のナラティブのように、いかに支離滅裂で、不合理に満ちているような心的現象であっても、そこに広がっている独自の世界構造を尊重することができるのである。

夢に現れる死者が異界とつながっているということは、死者を媒介として、現実もまた異界とつながっていることを示している。現実というのも、一つの確固たる客観的な世界があるわけではなく、主観的なナラティブの集合体である。末木は、近代は、感覚でと

らえることのできる「顕の世界」を強迫的に先鋭化してきたために、豊かな文化的精神性が犠牲となり危機に瀕した病理的な状況を作り上げてしまったが、だからこそ、その反動から、感覚ではとらえられない「冥の世界」の意義を改めて考える時代に来ていることを強調している（末木・2018）。

このことに関連して、現実（顕）と夢（冥）とが交差することで人生そのものの変容が実際に起こることについても触れておきたい。日本の中世では、夢や靈験によって自分の人生を決断するということがしばしば見られる。たとえば、12世紀の初期に編纂された仏教説話集である『今昔物語』には、次のような話（第19巻第11話「信濃国王藤観音出家語」）がある。

ある薬湯の出る温泉に住む村人が夢を見た。誰かが「明日の牛時（午後2時頃）に観音様がこの温泉に来る」という。驚いて「どのような御姿で来られるのか」と問うと、「40歳くらいの武士が馬に乗ってくるがそれが観音様の化身である」という。そこで夢から覚めた村人は、早速にそのことを村の人々に告げると、村の人々はその時刻に温泉に集まり、そこらの掃除などをして観音様を待つことになった。牛時を過ぎて末時（午後4時）になった頃、夢で聞いていたとおりの馬に乗った武士が現れた。その武士に向かって村人たちが一斉に拝み出すと、武士は驚いて「これは一体どういうことであるか」と尋ねた。村人たちから夢の事情を聞いた武士は、「自分は狩りをしていて馬から落ち、傷を負ったので癒すためにこの温泉に来た。皆の話を聞いていると、どうやら自分は観音の化身であるらしい」と言って出家を決意し、そのまま京都の比叡山に行き僧になったという。

さて、このように現実と夢とが混在するのは、中世社会さながらの出来事であって、現代社会では到底考えられない、と思うのは見当違いである。夢を介して人生が変容したという事例は、現代の夢分析の中にも枚挙にいとまがないほどである。本稿の最後に取り上げた事例はこのことを端的に示しているものであり、とりわけこの夢に現れた死者（クライアントの父親）というのは、冥の世界＝異界からのメッセンジャーであると言っても過言ではないだろう。

死者の存在を通して異界とつながるということは、  
混迷を極める現代の精神状況において、冥の世界の意  
義を受け止めて、豊かな文化的精神性を回復するた  
めの突破口なのである。

## 引用・参考文献

- Crick & Michison (1983) *Reverse learning or Dream to forget*,  
Neural Networks, pp.427-434
- Freud, S (1900) *Die Traumdeutung* (高橋義孝・菊盛英夫訳  
(1994)『夢判断(上・下)』日本教文社)
- 東山紘久(2002)『プロカウンセラーの夢分析』創元社
- 東山紘久・加藤廣隆(2007)『カウンセリングと宗教』創元社
- Jouvet, M. (1992) *La sommeil et le reve*. Paris: Odile Jacob (北  
浜邦夫訳(1997)『睡眠と夢』紀伊国屋書店)
- Jung, C.G. (1916) *Allgemeine Gesichtspunkte zur Psychologie des  
Traumes* (横山博監訳(2016)『ユング夢分析論』みすず書  
房)
- Gergen, K.J.(1995) *Realities and Relationships Soundings in  
Social Construction*, Harvard University Press (永田素彦・  
深尾誠訳(2004)『社会主義の理論と実践—関係性が現実  
を作る』ナカニシヤ出版)
- 馬淵和夫, 稲垣泰一, 国東文麿 現代語訳(2000)『新編日本  
古典文学全集36 今昔物語(2)』小学館
- 松田英子(2010)『夢と睡眠の心理学』風間書房
- 諸岡了介, 相澤出, 田代志門, 岡部健(2009)「現代の看取  
りにおける『お迎え』体験の語り」『死生学研究』第9号
- 岡田斉(2011)『夢の認知心理学』勁草書房
- 奥野慈子(2015)『「お迎え」されて人は逝く』ポプラ新書
- 西郷信綱(1993)『古代人と夢』平凡社
- 酒井紀美(2001)『夢語り・夢解きの中世』朝日選書
- 櫻井武(2010/改訂版2017)『睡眠の科学—なぜ眠るのか  
なぜ目覚めるのか』講談社
- 末木文美士(2018)『顕冥の哲学1 死者と菩薩の倫理学』ぶね  
うま舎
- 渡辺恒夫(2016)『夢の現象学・入門』講談社選書メチエ
- Winson, J. (1990) *The meaning of dreams*, Scientific American,  
November, pp.42-48

